

沿革 昭和二十九年四月町村合併促進法により旧渡村、旧一勝地村、旧神瀬村の三方村が合併して誕生したのが球磨村である。

旧三方村とも、古く鎌倉時代から相良藩に属していたが、明治の廃藩置県後地方自治制度の改革にとまない、幾度か行政区画が変っている。

しかし、明治二十二年の町村制施行以来、昭和二十九年の合併に至るまでは、旧三村の行政区を形づくっていた。

環境 熊本県の南部に位置し、東は人吉市および山江村、西は芦北郡芦北町、南は鹿兒島県大口市に、北は八代郡坂本村に接している。

熊本県で五番目に広い村であるが、その八十七％は山林で村全体が山岳地帯といつてよい。

その中央を東から西へ日本三大急流のひとつ球磨川が貫流、球磨川をはさんで南に国見山（九六九メートル）、北に白岩山一、〇〇二メートル）を最高峰として山々が連なり、これらの山岳を縫って

人口 7,817人
面積 207.37km²
財政 1,257,870千円
重要施策
①生産基盤整備と経営の近代化
②教育の振興
③道路整備と観光の開発
④社会福祉の増進

大小無数の川が球磨川にそそいでいる。気温は夏季と冬季の寒暖の差が大きくやや大陸的变化のある気候である。

産業 産業の主なものには農業と林業である。

農業は、山村特有の形態から耕地といえは渡地区の一部を除き、そのほとんどが山の斜面を切り開いた階段式田畑で、面積も少なく生産性も低い。

したがって、米作中心の農業ではあるが零細農家が多く、いきおい第二種兼業農家が多いためを占めている現状である。そこで、米のほかに、栗、梨などの

果樹類、たばこ、養蚕などの特用作目、さらには肉用牛などを基幹作目として奨励、その振興を図っている。

林業は、広大な山林面積と豊富な資源に恵まれ、昔から農業とともに農家経済の支柱である。そのようなことで山に対する愛着心あるいは熱意は旺盛で、植林も進み今では全林野の約六十七％は人工林である。

林産物としてはなんとといっても素材で最近一年間の生産量は約一万六千方メートルに及ぶ。そのほかシイタケ、パルプ材などがこれに続く。

自然を生かした環境づくり

観光 これまで観光的に余り知られていなかった球磨村も、大鐘乳洞・球泉洞が観光洞としてオープンしたことに伴って一躍クローズアップされてきた。この球泉洞は県下初の大観光洞として、そのスケール、あるいは洞内の豊富なツララ石、石筍など二次生成物からしても全国有数の鐘乳洞として折紙をつけられ、オープン以来連日五千人をこえる入場者でにぎわっている。

また、本村を貫流する球磨川は観光川下りコースとして知られているが、この球磨川下りの終点を球泉洞下まで延長（延長区間に名所「槍倒しの瀬」がある）

し、球磨川下りと鐘乳洞とを組み合わせた新観光コースが近く誕生する。

また、球磨川下り発船場を村内渡とするショートコースも計画されており各方面から期待されている。

そのほか、神瀬、高沢にも多くの鐘乳洞があり、さらに未開発ではあるが横井地区には広大なカルスト台地もある。このカルスト台地から遠く天草を望む景観はすばらしい。

今後、川下りと洞穴群、さらにカルスト台地を結ぶ観光ルートの開発、球磨川及びその支流でアユ、コイ、ヤマメなどの釣りを楽しむなど現代にマッチした健康的なレジャー観光のため開発が期待される。

特産品 特産品としては一勝地焼をはじめ一勝地栗や栗、みかん等の果樹類、ワラビ、ゼンマイ、タケノコなどの山菜加工品、シイタケ等がある。

一勝地焼は、その昔相良藩の御用窯として始められたもので、その作品は、素朴な中にも雅趣に富み、移り香しいといわれて重宝がられている。現在の窯元は十代成田勝人氏、年三回程度行われる窯開きのときは、県内外からのマニアにぎあう。

そのほか、球磨川の鮎は、本村付近が最も急流なるがゆえに、生育もよく、味もまた格別である。

（球磨村）



▲球磨川下り（球磨村一勝地「修理の瀬」付近）



▲振興作目のひとつ栗



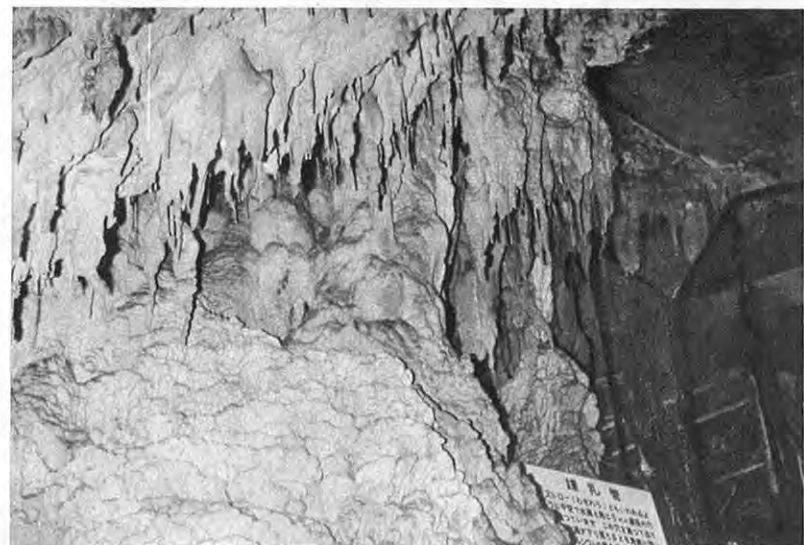
▲観光土産品（山菜加工品、一勝地焼、鮎のうるか等）



▲温泉つき「老人いこいの家」(S49.4オープン)



▲見事な植林地（10年もすれば村の台所をまかぬます）



▲球泉洞内の美しいツララ石（九州一の鐘乳洞として5月3日オープンしました さながら「地底の博物館」です。）